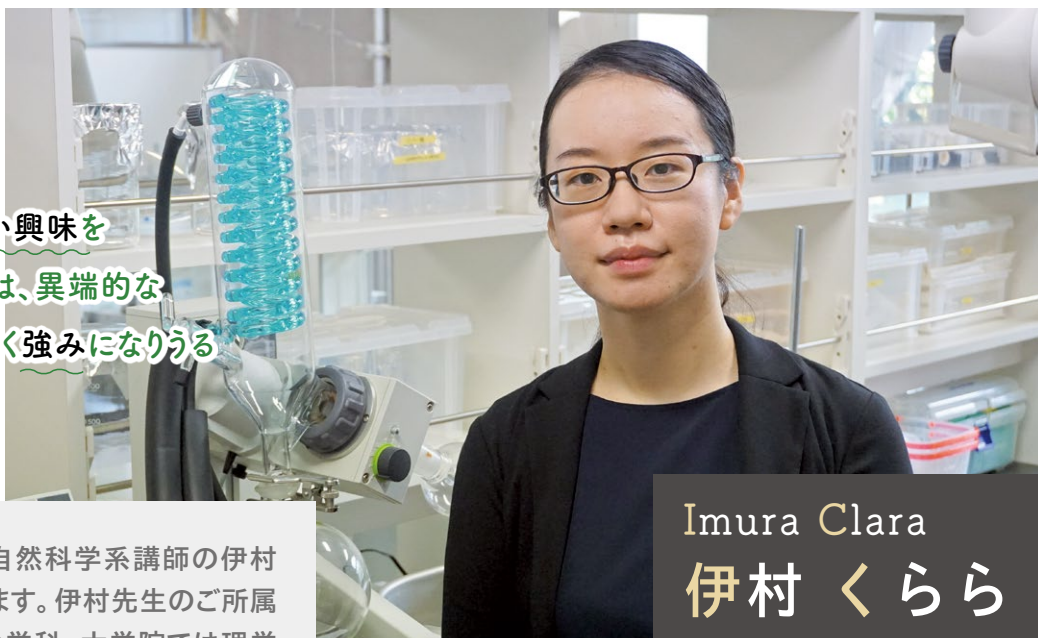


# 教員紹介

複数の視点や幅広い興味を  
持ち合わせることは、異端的な  
ものではなく強みになりうる



Imura Clara  
伊村 くらら

今回は、基幹研究院自然科学系講師の伊村くらら先生をご紹介します。伊村先生のご所属は、学部では理学部化学科、大学院では理学専攻化学・生物化学コースです。

## R1 ご出身、ご経歴などについて教えてください。

出身地は北海道札幌市です。土地柄に加えて多少おらかな時代だったというのがあります。趣味や課外活動などで好き勝手にがちな子供だったと思います。東京理科大学に進学した後は、そのまま博士後期課程まで進んで学位を取得しています。さらに1年間を日本学術振興会特別研究員というポジションで過ごした後、中央大学で助教として教育と研究にあたりました。お茶大には2017年に着任し、今年で4年目になります。

## R2 先生のご専門の研究領域のお話を聞かせてください。

これまでに扱ってきた研究対象を挙げていくと、ゲルやエマルジョンといったソフトマターから無機物の金属ナノ粒子まで、とても多岐におよびます。色々な研究テーマに手を出してきた格好になるのですが、いずれも根幹となる専門領域は「界面化学」という分野です。界面とは、水と油のように混じり合わない異なる物同士が接している面のことを指します。例えば、金属のナノ粒子はサイズをととても小さく整えた金属の粒なのですが、その界面の総面積は、同質量の金属結晶の塊と比べて非常に大きくなっています。そのため、先進のナノ材料科学の世界では、界面の状態を考えることも肝要となってくるわけです。水と油を振り混ぜてもいずれは二層に分かれて分離するように、本来混ざりあわないものを微細な粒にす

ると不安定でいずれは凝集してしまいます。この状態を保たせるには界面に何らかの工夫が必要です。洗剤などでも知られる界面活性剤は、そういった微小な物質の表面の性質を変えて操る力を持っています。その他にも界面活性剤は、溶液中で自発的に分子が集まり大きな会合体としてふるまったり、ナノ物質を運搬する働きをしたりと何通りにも働くことが可能です。現在の研究では貴金属ナノ粒子を自在に集めたり移動させたりする制御手法の開発にフォーカスしていますが、どこにでも「界面」の化学は広がっていますのでこれからも新しいチャレンジをしていきたいと考えています。

## R3 先生が現在のご研究を専門にするようになった経緯を教えてください。

中学や高校の頃まで遡ると、化学と同じかそれ以上に物理にも興味を持っていました。化学の研究者ならばずっと化学一筋だろうと思われるかもしれませんが、私自身は寄り道をしながら今に至っています。実際に研究ともなると、大学受験科目のように分野や領域の明確な線引きはほぼありません。例えば私の研究分野とも関わりのある材料科学の世界は、化学以外にも物理や生命科学など様々な分野の研究者が集まっています。界面で起こる現象も、化学の視点から、物理の視点から、様々にアプローチすることが可能です。大学や大学院で物理化学や化学工学を学ぶうちに、界面化学を武器にしてナノ材料を作り上げることに興味湧いてきました。複数の視点や幅広い興味を持ち合わせることは、異端的

なものではなく強みになりうると思っていますし、大学時代にそういった懐の深い分野に出会えたことが幸運であったかなと感じています。

## R4 お茶大の印象やお茶大生に向けてのメッセージをお聞かせください。

少人数で落ち着いた環境の学び舎と言われますが、まさにその通りと思います。それに加えて「お茶の水」というべき凛とした雰囲気も感じられます。互いを認め合いながら自身にも誇りを持っている様子は、学生の皆さんのふるまいにもあらわれています。こうした雰囲気はやはりお茶大の歴史の中で培われてきたものでしょうし、この先も失われて欲しくない大きな財産です。

これからを担う皆さんには、お茶大の先人がそうであったように、熱意をもって物事に挑戦し新しい価値観を切り拓いていくことを望んでいます。多少尖っていても、周囲を少し驚かせても良いと私は思います。自分ならではのものを見つけられれば、是非それを誇りに思ってもらいたいです。何に取り組むべきかというのは、学びや出会いをヒントにしながら自分自身で見つけ出して欲しいと思います。コロナ禍で見え感じたことも、一つの思考指針となりうるでしょう。不自由さがフォーカスされがちな昨今ですが、若い皆さんの中には可能性が十分に眠っていますから、知らず知らずのうちにリミットをかけてしまうのは勿体ないことです。皆さんの挑戦を後押しできる学び舎でありたいと思っています。

文責：基幹研究院自然科学系教授  
森 義仁